



成立期社会科の一断面：
北海道第三師範学校附属校の社会科実践(その3)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 正生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004833

成立期社会科の一断面

— 北海道第三師範学校附属校の社会科実践（その3） —

吉 田 正 生

北海道教育大学旭川校社会科教育研究室

第I章（はじめに）⇒（前々稿）	第II章（旭 橋）⇒（同 前）
第III章（附 属 校）⇒（前 稿）	第IV章（講 堂 で）⇒（本 稿）
第V章（屋内運動場）⇒（次稿に予定）	第VI章（家のあかり）⇒（同 前）

IV 講堂で

1. 千葉の授業とその後景

この日の公開授業は、午前8時30分から始まった。千葉の中1生社会科の授業が本校の講堂で、溝口五郎¹⁾の小3生社会科授業が附属校の屋内運動場で行われた。また松本謙太郎²⁾が家庭科室を使って小学校2年生の図工授業を展開した³⁾。

師範学校は、附属校に対して本校と呼ばれていた。本校は、道路一本をはさんで附属校の北側にある。本校の正門を入ると正面に校舎玄関、その奥に講堂があった⁴⁾。講堂、屋内体操場、武道場も含めて校舎と呼ぶなら、校舎の左手（西側）には昭和池が広がっている。

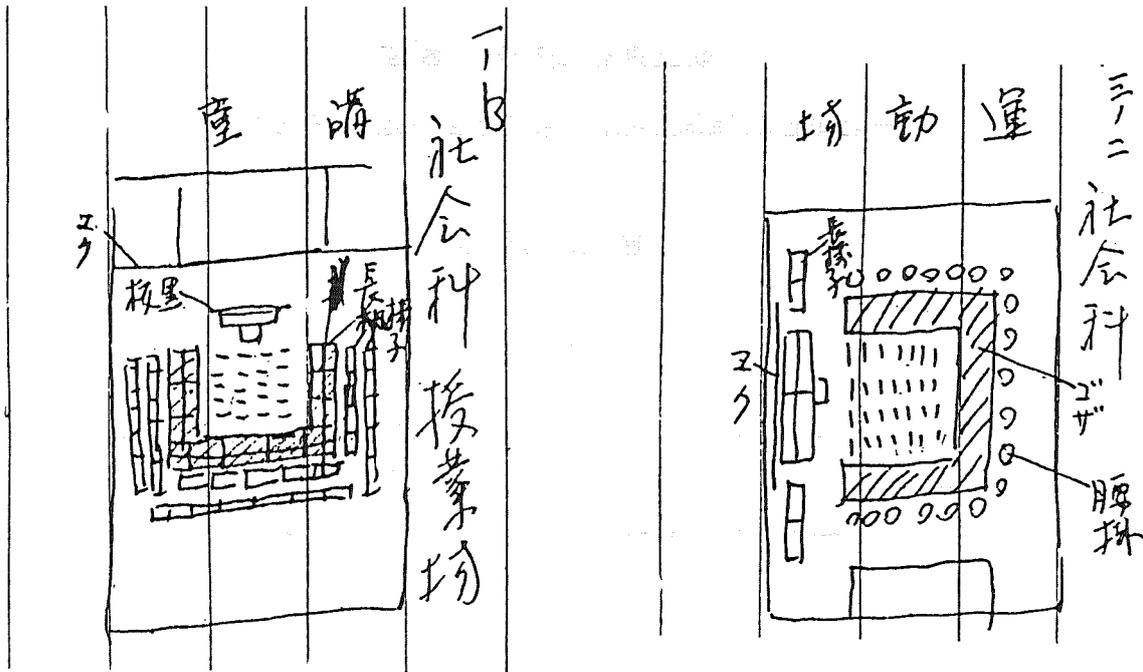
この池は、昭和3年秋に行われた御大典の記念事業として、師範生たちが教師たちの指導のもと造成したものである。周囲には樹木が植えられ、築山もつくられていた。池を中心としたこの学校園は「記念校園」と命名されていたが、工事は昭和3年6月20日に始まり、昭和6年9月4日に落成したとされている。3年以上の月日をかけて作られたものだったのである⁵⁾。当時、北三師はこれを「作業教育の具体化」⁶⁾として位置づけていたが、生徒にとっては大変な負担だったようで学校園築造に参加したある卒業生は、「1クラス40名が卒業時には25名に減少したのは、当時の作業教育が労働過激であったから」と評している⁷⁾。

校舎は、2階建てになっており、1階が主として特別教室や校長室、そして職員室となっており、2階はすべて教室になっていた。

千葉と溝口の授業場の設営は、前日のうちになされた。2日、北三師附属校は授業を午前中で切り上げ、午後を公開研究会の準備に充てた。新制中学の2年A組の生徒たちが山田功教諭の指示のもと、本校講堂へ机と椅子を運び込んでいる。

千葉の授業場は、第IV-1図のように設営された⁸⁾。生徒たちを取り囲むように置かれた長椅子は、授業を見に来た教師たちのためのものであった。正面には黒板が2枚置かれた。1枚は、生徒たちがこの日まで調べて作成した発表資料を貼るためのもの、もう1枚が板書用であった。「会場係計画案」で見ると、生徒たちは一斉指導の座席形態になっている。しかし千葉の記憶では、分団毎に座っている。

授業の内容からするなら、千葉の記憶のとおり座っていた方が、授業は進めやすい。授業は、旭橋以北の地域が今後一層発展するためには岐線をどう活用したらよいか、分団毎に調べに基づいて意見を発表するも



第IV-1図 (千葉の) 授業場設営予定図

※参考までに、溝口の方の授業場の図も添えた(右側)

のだったからである9)。

この授業の指導案は、次ページ以下5ページに掲げたようなものであった10)。

授業は、本時の学習課題の把握から始まった。「旭川市はどのように発達してきたか。将来についても考えよう」。すなわち、本時の課題は2つであった。

前半の課題は、いつごろ軌道ができたか、延長されたのはいつか、バス路線はどうか、鉄道は……といった交通網拡大の歴史学習を行うためのものであり、かつまた、現在の旭川市を支えている産業と将来有望な産業を把握させる地理学習を行うためのものであった。

千葉がこのような学習を構想していた頃の旭川市の様子はどんなものだったのか。千葉の指導案に取り上げられた商工業と交通について簡単にみてみよう。

『旭川市史』によると、市の工業は「上川地方開発早々に着手された」11)醸造業を嚆矢とする。明治24年のことである。その後、上川地方で生産された米の「大集散市場」12)であり、かつまた「林産物の一大市場」13)という旭川市の性格から精米工場や製材工業、更には木工業が盛んになる。

千葉が第三師範を卒業した頃、すなわち昭和10、11年頃には、「斎藤木材株式会社・松岡木材株式会社・旭川木工場・小泉製材所・尾田木材店・その他として、田中組・吉富木工場・森本木工所・白川木工場・株式会社田中木工場・小原木工場・北海木材会社旭川工場・牛丸木工場・塩野谷木工場・糸川木工場」など「主なる製材会社・工場」14)とされたものだけでも15を数えた。

更に主な家具・建具・洋具工場として、「青山洋具工場・浅香・松木・青野・小林・田中各家具工場。建具工場としては、松森・熊谷・出口・川村・松本各建具工場があった」15)。

大正2、3年ごろには旭川市内の「家具指物類の木工業は極めて微々たるもので、官庁・学校・会社の木工具を作るのみで、一般家庭のものは移入」16)に頼るという状態であった。

しかし、道庁、旭川市役所の奨励、旭川商工会議所の努力によって「昭和初期には市内需要の家具類は、桐材製品を除く外は内地品の移入」17)によらずにすむようになった。そのみならず建具類は、「全産額の

中学1年社会科学習指導案

日 時…昭和22年10月3日

指導者…北海道第三師範学校附属中学校教諭 千葉大作

I. 単 元 わが国の都市はどのように発達してきたか。また現在の都市生活にはどんな問題があるか。(V)

II. 指導観 敗戦後の今日大部分の都市は戦災をうけ、国民の社会生活は大きな変動に遭遇している。生徒たちの社会経験もまた決して単純ではない。郷土旭川が軍都としても過去の形から如何なる姿に発展するかは市民一人一人に与えられた課題である。この時にあたり、わが国の「都市発達の諸相」と「都市におけるおおくの社会問題」への関心と活動並びにこれを可能ならしめる条件などについて理解させ、民主日本建設のため生徒たちが明るい希望を以て対処してゆくように指導しなければならぬ。

III. 目 標 わが国都市発達の原因と現状の調査より、現在の都市生活におけるいろいろの問題を考察させ、一層都市生活を純化し、再建日本に寄与せんとする心構えを向上する。

IV. 指導の計画 (40時間)

	主 眼	問 題	学 習 活 動	時間
1	郷土の構成員の立場から各自の責任を明かにする	旭川はどのように発達してきたか。将来について考えよう	北海道の開拓と郷土発達の通観／近文山見学／	12時間
2	改善すべき諸問題を見させる	旭川市は今どんな問題をもっているか実際の問題について調べよう	食料の不足／住宅の不足／交通道德の低下／保健衛生施設の不十分／犯罪行為の続出／警察署見学／文化都市旭川の建設	13時間
3	都市と社会生活との関係を理解させる	都市はどのような発達の途を辿って生まれたか。それらの都市はどのように分類されるか	旭川市の発達形態／北海道の各都市／日本の各都市／商業都市／交通都市／文化都市／釧山都市／保養都市／遊覧都市	3時間
4	都市の復興問題について理解させる	戦災都市にはどのような問題があるか。それらの問題をどのように解決したらよいだろう	焼跡の整理美化／都市計画～復興計画／建築の復旧／交通機関の復旧整備／通信機関の復習(ママ)／公德心の高揚／転入者の抑制／常備消防本部見学	4時間
5	内省により一層力強い実践に導く	自分たちのしている社会生活はこれでよいであろうか	公民としての公共公益公德の精神態度涵養／公民としての社会秩序高揚／公民としての礼儀向上／奉仕作業の実施	4時間
指 導 結 果 の 判 定				4時間

V. 本時過程 (問題1…12時取り扱い中第10時限)

1. 学習目標の設定

話し合いにより問題(1)を板書し、本時学習の主眼を明かにする。

“旭川市はどのように発達してきたか。将来についても考えよう。”

2. 学習の発展

展	開	《聞き取りによる補い》
<p>(a) 前時調査事項の報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 交通関係 <ul style="list-style-type: none"> — 鉄道 — 軌道 — バス ・ 商工関係 		<p>旭川市の交通関係と商工関係については分団毎に前もって調べさせておいた。鉄道については国鉄に聞き取り調査にいき、軌道については旭川電気軌道という会社に聞き取りにいかせた。バスは、道北バスに。商工関係の聞き取りは市役所に聞き取りにいかせる。</p> <p>いずれの場合も事前に教師のほうがよくお願いをしておいたということである。</p>
<p>(b) 旭川市将来の都市計画の構想についての話し合い</p> <p>◎ 報告中特に鉄道の項を中心として取り扱い、郷土沿革の上から交通発展の相をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ アイヌと丸木舟 ・ 笹苅り道路と駄馬 ・ 道路と馬車 ・ 鉄道の開通と発展 <p>◎ 郷土の地図から特に旭橋以北の問題をとりあげて討議する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 岐線は交通運輸上にどのような効果を与えているか。 ・ 岐線を中心とする工場分布の状態からどのようなことを知り得るか ・ 将来この線をどのように活用したらよいであろうか。 ・ その他この地区として特に取上げる問題はないか。 		<p>生徒に事前に調べさせておいたが、授業では主として教師の説明によって北海道の交通がどのように発展してきたか理解を図った。</p> <p>アイヌが丸木舟をつかって川を航行していたこと、したがって川が大事な交通路であったことを話し、次に背丈ほども茂った熊笹を刈り取り人がようやくとおれるほどの幅の道をつくり、本州から開拓のために人々が入ってきたこと、その人たちの荷を馬の背に積んで運んだこと。</p> <p>北海道に住み着いた人々が道を広げ馬車を通れるようにしてそれによって交通するようになったこと。</p> <p>鉄道網が発達してきたこと。ことに旭川は道北の中心として、ここからいろいろな都市にいくための分岐点になっていること。これからは鉄道の時代であること。<u>（この部分の学習は、交通という社会機能について詳しく理解させるということを目的としていたのではなく）郷土の発展について考えさせるという立場から取り上げた。戦前に第七師団があった関係で、旭橋以北の地域が発展しつつあった。特にみずほ通り（旭橋から第七師団まで通じる道路）付近の人口が戦後も増えていたが敗戦によって第七師団はなくなり、地域発展の一つの大きな要素がなくなってしまった。そこでここを取り上げ、師団がなくなったこの地域がさらに発展していくには、鉄道の世の中なのだから岐線をどう生かすかが郷土発展の大きな要素なのだというを学ばせたかった（事前に岐線に沿って歩き、沿線の様子をみさせていたので授業中意見は活発に出たということである）。</u></p>

3. 学習の整理

展 開	《聞き取りによる補い》
<p>以上を市役所見学の経験から批判する。</p>	<p>市は市としての旭川発展のための都市計画をもっている。事前にそれを子どもたちと一緒に市役所に見学にいき、聞かせておいた。</p> <p>それによって自分たちの計画の現実性を子どもたちに振り返らせる予定であった。子どもたちから出たプランのなかには明かに非現実的なものもあったが、それに対し、教師のほうから深く説明することは避け、ともかく旭川の将来に対する希望であるということで、本時はまとめた。</p>

※ 上記指導案中、右側部分に設けられた《聞き取りによる補い》欄は、筆者及び学生（平成5年度入学生）によって平成6年11月から平成7年5月にかけて断続的に行われた聞き取り調査の結果わかったことである。

七割ほどは道内各地へ移出」するほどにまでなり、「ついに全道第一の木工品産地と称せられるようにな」¹⁸⁾っていた。

また北海道産の水松（イチイ；俗にオンコと呼ばれる）が「鉛筆軸として、品質優良なため鉛筆として盛名があ」り、市内には全道各地に販路をもつ山下鉛筆工場もあった¹⁹⁾。

更に非常時局下の昭和13年、パルプの国内自給恒久対策として道内数ヵ所に新設されることになった国策パルプの工場の一つが、誘致運動が功を奏して旭川市内に建設されることになった²⁰⁾。翌14年4月に起工され、操業は昭和15年8月からとなっている²¹⁾。

第2次大戦後の昭和21年、旭川市は「工業立市の計画を立て」それに基づいて様々な施策を実行に移した。窯業促進施策として窯業振興協会を設立したり、羊毛加工工場などを誘致するというのがそれであった²²⁾。

昭和22年末の「旭川市工業生産高」という統計資料によると、製材及び木製品工業は、生産高第3位（1位は化学工業、2位が食料品工業）、工場数第1位（2位が紡績工業、3位が機械器具工業）、職工数第1位（2位が化学工業、3位が食料品工業）であった。木工業は旭川市を支える重要産業だったのである。この傾向は、昭和24年には一層強まっている。木工業は、生産額、工場数、職工数のいずれにおいても第1位となるからである²³⁾。

しかも、この木工所や製材所は、千葉が教えようとしている子どもたちが多く住む北部地域に集まっていたのである。

さて、旭川の商業のほうはどうであったろうか。旭川市史は次のように述べている²⁴⁾。

昭和21年度に入るとやや安定の方向をたどり、戦前の自由なる商業に復活してくる。旭川市当局も、連合軍司令部経済科学局生産課長コーヘン大尉の指示にしたがって種々の商業振興の施策を実施するところがあった。企業許可令が廃止となって、これまで圧縮されていた商業部面も一時に拡張され、活況を呈するに至ったので、市当局としてもこれが正常なる発展を期するために尽力をした。

このような記述の後、次の4つが具体的に行われたこととして述べられている。すなわち²⁵⁾、

○商工復興祭及び平和祭 ○平和通り街灯復活 ○公共マーケットの設置 ○日用品交換会 などがそれである。

鉄道の敷設は旭川市にどのような影響を及ぼしたのだろうか。『旭川市史』²⁶⁾によってそれをみたときに、千葉もおそらく鉄道の影響を『市史』中の「五. 鉄道開通の影響」の記述者と同じように見ていたのだろうと思わせられる。またそれゆえに、旭川市の発展について子どもたちに考えさせようとしたときに、「交通」を教材として取り上げたのだろうと推測できるのである。さらに授業のなかで千葉が子どもたちに話したこともこの『旭川市史』の記述と大同小異のものであったと思われる。

五. 鉄道開通の影響 上川地方は植民地の選定、離宮予定地の確定及び市街地の区画あって以来、移民多く、さらに上川鉄道の敷設決定するや移住者激増し、大小の農場次々と相競って開墾に従事、30年中鉄道の開通に先んじて上川線及び十勝・天塩両線に沿い、石狩国上川郡には東川・愛別、空知郡には歌志内・富良野、天塩国上川郡に剣淵・士別・多寄・上名寄、中川郡に下名寄などの新村がぞくぞくと設けられ、鉄道敷設の影響が如何に大であるかを物語っている。殊に旭川・空知太間の道路は前述した如く融雪霖雨の時は忽ちにして泥沼と化し、荷車は輪を埋め、駄馬は腹を没し、往々大小豆などを包装の俣これを途中で遺棄し去っても、また顧みる者さえなかったという状態であったので、駄馬一里の賃金は三十銭で、従って米一石の運賃は二円五十銭を要し、物価の高いことは全道にその比を見なかった。一方地方農家はその産物を売却しようとするや極めて低廉、収支つぐのわず、経済は困難を生じ、住民その堵に安んずることができず、困憊あえいでいたが、鉄路一たび通ずるに及ぶや滝川・旭川間の鉄道運賃は米一俵十銭内外（石二十五銭内外）となり、その利する所すこぶる多く、低廉であった地方農産物も搬出の便を得て、その価格もまたあがり、ようやく農家経済の均衡をはかり得た。

かくて旭川村は付近農村の振興とともに進展、殊に上川鉄道の開通式に際しては多数知名の士視察し、その名声益々世上に喧伝せられるにいたり、市街の発達、諸業の興隆を示すに至る。

旭川村市街地の発達は、固より地の理の便に負うところ、大とする説もあるが、急速の進歩をした理由は上川鉄道の敷設にあらう。すなわち鉄道の開通にともない道庁鉄道部工場を旭川村に設置、旭川村は官線鉄道の焦点となり職工・人夫ら続々入り込み、加えて近文に第七師団の設置が決定するや急激の発展を促進、本道各地はもちろん、他府県よりも来住多く、忽ちにして市街地は膨張、単に予定市街地ばかりでなく師団用地に至る道路の両側は商人・職工ら軒を並べて居を構え、店を張り、此処にもまた市街を形成する。平素行人の稀で寂寞を極めた旭川村が、一朝激変して旅客の出入り頻繁を極めるに至ったのも、主として鉄道の開通と師団の設置とによる。

この前半で得た歴史的・地理的知識は、地域の発展につなげる為に岐線をどう活用したらよいかという後半の課題（＝「将来についても考えよう」）について話し合うとき、生徒各自が述べる意見の根拠となるべきものであった。

生徒たちの意見の根拠はもう一つあった。それは実際の岐線の沿線風景であった。この単元の学習に入ってから千葉は、生徒たちを岐線に沿って歩かせていた。岐線に沿って歩いた生徒たちが改めて見たものは、岐線に沿って立ち並ぶ木材工場やその貯木場、そして野菜畑等を潰して建てられた住宅であった。

道北の中心都市旭川には、周辺の森林からとれた木材が鉄道によって搬入されて来た。本来、第七師団のためにつくられた岐線も貨物線として木材の搬入に使われるようになっていた。そこで、この沿線に木材工場が立ち並ぶようになったのである²⁷⁾。

また旭川市は、先の『旭川市史』の記述に見られるように、第七師団が旭橋以北にあったことで市街地を北へと延ばしていた。こうした北部地域の人口増を受け、新北門尋常小学校が北門尋常小学校（旭川師範学校代用附属であった）から分かれて旭川市近文2264番地の内に新設される。昭和2年のことであった。この新北門尋常小学校が昭和7年に改称され、大有尋常小学校となる。

昭和52年に出版された大有小学校の『開校50周年記念誌』によれば²⁸⁾、昭和3年開校当時の大有小学校の

周りには野菜畑があるのみで、目に映る建物といったら高野牧場の牛小屋1棟だけという状態であった。昭和10年には、児童数は開校時の児童数、519名のおよそ2倍（但し、昭和8年からは高等科も設けられている）になっている。しかし、学校周辺の様子にさほどの変化はなかったようである²⁹⁾。

昭和10年9月、第2期校舎増築工事落成。この工事をもって予定校舎の全部が完成したことになる。当時の本校周辺は、北側（旭町側）に若干の人家があるのみで、あとの三方は一面が野菜畑であった。2階の教室からは大雪山が見え午後の静かな授業時間中には、教室の中へとんぼが入ってきた。

一方児童数は昭和14年まで伸び続け、その後17年まではほぼ横這いぎみの状態になる。更に、昭和21年まで今度は減少に転じるが、この年を境に再び伸び始める。それも戦前の伸び率を遥かに上回るものであった。

現在の大有小学校の周りは住宅が立ち並び、木材工場とその貯木場が目立つのである。

千葉は昭和13年以来、この様な大有小学校周辺の変遷を見てきたのである。また、毎日大有小学校の横の道を通って附属校に通っていた³⁰⁾。

大勢の参観者の見守る中、いよいよ授業は話し合いに入った。生徒たちに岐線をどう活用したらよいかを討論させると、活発に意見が出された。岐線を延長して旭川の市街地をもっと拡大しよう、線路を複線化して本数をもっと増やそう、現在貨物線としてしか利用されていないが、適切な場所に駅を設け人を乗降できるようにし、客車も走らせるようにしようなどが主な意見であった。要するに調べたことに基づいて地域発展のために岐線をどう活用したらよいか、生徒たちが「提案する社会科」だったのである。

この討論がどれほど見事に組織されたものだったのかは、今となってはわからない。しかし、少なくともわかることが一つある。それは、戦前には一方的な講義式の授業しか行ったことのなかった千葉が大勢の参観者を前にして、ともかく討論の授業を展開し得たということである。1946年5月に出された『新教育指針』はその第2部「新教育の方法」の方法において「討議法について」という章をわざわざ設け、そのなかで実例まで示している。千葉は、藤田に習い、また自分でこの実例を「熟読」することによって新しい教育方法を習得したのであった。「『民主的な態度を作り、民主的な生活をきづきあげてゆくのに、最も効果的な方法』として意義づけられ」³¹⁾た討議法を授業として組織していけるようになること、これは実践者である千葉にとって大きな課題であったろう。千葉は、今この課題を何とかこなせるところまで実践者として成長していたのである。

旭川市の復興・発展について考えさせるといっても、いきなり旭川市全体の課題を学習内容として取り上げることなく、生徒たちが日常暮らしている地域とその課題を学習内容として取り上げ、それを単元の冒頭に置くような構成にしているところに千葉の社会科理解の深さが窺われる。

一体千葉の構想したこの単元は、当時の社会科関係者の目からするとどの程度のレベルのものであったと評価できるのであろうか。節を改めて、それを見てみることにしよう。

2. 千葉の指導案の内容分析

(1) 実践史における分析について

社会科カリキュラムあるいは社会科実践の分析視点として、おそらく二つのものがあり得る。一つは分析者自身の問題意識を分析視点とするものであり、今一つは分析対象となる実践等が行われた時代に生きた人間の目に寄り添って行う分析である。前者を「現在の視点」、後者を「過去の視点」と呼ぶことにしよう。

それぞれの視点は、それ独自の価値をもつ。

前者は古い実践を新たな相貌の下に蘇らせ、今まで見えなかった側面を我々が見ることを可能にする。ま

た社会科の新しい方向を考える上での手がかりを与えてくれることにもなる。これは、分析者自身の問題意識、社会科観に基づいた分析であるがゆえに、社会学者たちがパーソンズたちの機能主義的アプローチを呼ぶやり方に倣うなら「規範的アプローチ」ということになる。

それに対して後者は、現在の我々の目で過去の実践等を裁断してしまうことなく、当時の人々と問題意識を共有したかたちで過去の実践を評価することを（完全にではないにせよ）可能にする。

ここでは後者の手法をとる。同時代人の目で千葉の実践を評価したい、そしてそれこそが実践史として行う分析であると考えからである。

千葉の同時代人として筆者が選んだのは、馬場四郎である。馬場が千葉の指導案を見た時にどのような評価を下すか、それを論述しようとするのである。

馬場にする理由は二つある。一つは、馬場が再現可能性のある内容分析の手法によって『学習指導要領社会科編（Ⅱ）（試案）—昭和22年度—』（以下『22年版Ⅱ』と略記）を分析しているからである³²⁾。

馬場四郎は、昭和17年、東京文理科大学を卒業している。在学中は主として社会学を研究していた。社会学専攻であったことが、馬場に内容分析というアメリカで開発された分析手法を身につけさせることになったのであろう。後に馬場はこの手法を駆使して日本史の教科書におけるナショナリズムに関する記述の分析をしている。戦前の教科書と戦後の教科書とでは、ナショナリズムに関する記述構造にどのような変化が見られるかを明かにした労作である³³⁾。

今一つの理由は、馬場がもし任務としてこの日の北三師附属校の公開研究会に参加していたとしたら、やはり千葉の授業をみることになっただろうからである。馬場は終戦後、文部省教科書局第一編修科社会科担当事務官として中等コース・オブ・スタディの編修に従事した³⁴⁾。したがって新制中学1年生の授業の方を馬場がみることになっただろうと予測しても決しておかしくないのである。

それでは馬場はどのような視点によって『22年版Ⅱ』を内容分析したのだろうか。馬場の分析視点は、大きくは次の三つになる³⁵⁾。

○各単元の内容を組成している公民、歴史、地理、3教科の割合はどうなっているか（＝「A. 組成教科の割合分析」）⇒以下、「組成視点」と呼ぶ。

○どのような質の学習活動が、どのような割合で、各単元に設定されているか（＝「B. 学習活動による分類」）⇒以下、「活動視点」と呼ぶ。

○どのような質の指導目標が、どのような割合で、各単元に設定されているか（＝「C. 学習活動と指導目標の関係による分類」）⇒以下、「目標視点」と呼ぶ。

「組成視点」は、公民、歴史、地理という三つの社会認識教科が、社会科という一つの社会認識教科の各単元にバランスよく組み込まれ融合されているかどうかをみるためのものである。馬場の言葉に即して言うとな次のようなことになる：「社会科はその発生の過程からみ」たときに「公民・歴史・地理」という「これを構成させた3つの教科」が「不可避免的に組み合わせられ」たものであることを「否定できない」。そうは言っても、三教科の内容が融合して社会科と言う新教科の教育内容にまで高まっているならば何も問題はないが、「わが国の現在の段階においては、大なり小なりに三教科の立場が複雑に混在して、各単元内容を構成している」。³⁶⁾したがって各単元をこれら旧3教科の内容が各単元にどのような割合で入り込んでいるかを析出し、単元構成の問題点を学習内容面から明かにしようとするのである。

この視点から『22年版(2)』を分析した結果、馬場は次のような結論を出した³⁷⁾。

1. 3教科の内容がほぼ均等に入れられバランスがとれた構成となっている単元は、ほとんどない。
2. 大体7年（中1）から8年にかけて地理的単元（地理的内容を多くもつ単元）が集中して表われている。
3. 公民的単元は9年の後半に集中している。

4. 歴史的な内容は、7～10年まで大体均等に配分されている。
5. しかし、一つの単元に歴史的内容をどれくらい入れるかについて特に考慮されているとも思えない。なぜなら1単元中歴史的内容が45%も占めるものがあるかと思えば、わずか5%しかないという単元もあるからである。

次に「活動視点」によって分析することで馬場がどのようなことを明かにしたかみてみよう。

馬場は学習指導要領にみられる学習活動を「単純な活動」と「比較的複雑な活動」とに二分した³⁸⁾。

各単元の性格を決定するために行った第2の分析は、学習活動そのものの性質に検討を加える操作である。その方法として、コース・オブ・スタディの序論、単元の展開の項にあげてある活動の分類によった。すなわち目による活動、耳によるなど7種類の活動の類型に対して、各単元の学習活動の例を分析してそれぞれ配分を試みたのである。…(中略)…そうして目・耳・口による活動を一括して、単純な活動(A)となした。また作図・文書・造型・一般的活動をまとめて、比較的複雑な活動(B)となした。(A)に属する活動は、学習活動としては比較的静的な、したがって指導が容易であり、実施上の困難や抵抗を感じることは割合に少ない。しかも目と耳を通して行われる活動は受動的なものが多く、この二つに口を介して行われる問答法を採り入れると、従来の教室において一般に広くみられた指導の形態を大体示すことになって、なんらそこから新しいものは生まれてこない。ただ終戦後においてわずかに討議法 Discussion Method が用いられるようになり、一部では調査学習というものが行われ、調査事項の報告をなすことが新しい学習形態を意味するものごとくに考えられていた。それらは多く口答活動主義 Verbalism に陥って、口先だけの皮相な学習に終わり、散漫で浅薄な結果に満足している場合が多かった。／これに対して(B)に属する活動は、身体に訴えてゆく積極的な活動であるが、複雑で指導も単純ではないので、とかく敬遠されがちのものであった。社会科の学習活動では、将来このような文字どおり体験を通して身についた学習に発展させることを望むのであるから、益々(B)に属する複合的な習作業を重視する必要がある。

※ 括弧内及び傍点は、引用者による。また／は、原文における改行を表わす。

上記の引用からわかるとおり、馬場は「比較的複雑な活動」こそが社会科らしい学習活動だとみており、各単元においてこれがどの程度取り入れられているかをみようとしたのである。

馬場はこの点に関して次のことを明かにした³⁹⁾。

1. A:Bの比率は平均すると、およそ6:4になり8年の第4単元が標準的なものといえるだろう。
2. 8学年の各単元は大体この平均に近いものになっている。
3. Bの活動が過半に達する単元は4つあり、それはいずれも7年のものである。
4. Bの比率が最大のもの(7年第3単元)は61%であり最小のもの(9年第2の口単元)は18%である。

しかしこれ以上のことを馬場はしていない。どれくらいの構成比が最適なのかという基準がないのであるからこれ以上は言えないのである。馬場の目に寄り添う限り、我々もこの地点でとどまらざるを得ない。

では「目標視点」によって馬場は『22年版Ⅱ』の何を明かにしたのであろうか。馬場は「指導目標をa・bの2群に分ち、aは知的目標とし、bは実践的目標としてみた」⁴⁰⁾。「知的目標」とされたのは、知識、理解、認識(現在のタームで言うなら「思考・判断」である)の3つであり、「実践的目標」とされたのは、態度、能力、技能、習慣、鑑賞力の5つである。

実践目標と括った五つのものについて馬場は次のような定義づけをしている⁴¹⁾。

技能は練習や熟練を要する作業活動で、地図を描く、グラフを作る、模型を作る、新聞を発行する、百科事典を使う等であり、能力は、会議や討論の司会をする、テーブル・スピーチを行う、ある場所を訪問して情報を得てくるというように、技能に比して熟練よりも経験を重ねることの重要なものをこれにあてた。態度は、観察や判断に際して正確な情報や事実を利用しようとする日常の傾向、自分の言行について自覚と反省を伴うような処置をする場合等、要するに良識とよき反省に裏付けられた日常の行動の規律、秩序を立てようとする場合をこれにあてはめた。習慣は、態度が一層反省と自覚の度を深めて、たえず秩序を立てようと意識的に努力が重ねられる場合、例えば言葉づかいを改めたり、交通道徳を守ったり、服装を整えたりする場合をこれにあてた。しかし態度と習慣の判定は最も困難なものであって、主観が最も多く混入するおそれがある。鑑賞力は芸術的な美的価値判断を伴うもので、レコード・コンサートを開いたり、映画批判会を行うなどで比較的判断に迷うことの少ない場合である。

しかし、学習指導要領にあげられた「学習活動例」を厳密に、それぞれの項目に分類していくことは困難である。馬場もそのことは認めている⁴²⁾。

このように個々の目標に照らすと、その帰属を確実に判定することは相当に困難であるが、aとbとの大分類に照らして考えると、この心配はほとんど解消するであろう。／両者はその性質が明瞭に異なるからである。

いくらaとbとが明瞭に異なっても分類の一番肝心な点が、さらに下位の枠に正確に分けることであるならば、上の馬場の言葉は何の説得力ももたない。真に必要なのは正確にaとbとに分けるレベルまでであるという前提があるからこそ、馬場は上記のようなことが言えるのであろう。そこで「目標視点」による分類に際しては、我々も馬場のこの枠までを受け継ぐことにしよう。

馬場は実践目標と知的目標との構成について次のように言っている。

一般には知的目標が多数を占めるのは止むを得ぬとしても、実践的目標も30%以上を含むのが望ましい。

したがって我々もこの馬場の評価基準にしたがって千葉の指導案を検討することにしよう。

さて、この三つの視点のほかに、我々が馬場の社会科プランや授業に対する評価視点として考慮しなくてはならないものがまだある。それは

- ① 内容構成原理として「社会の必要」と「児童の興味」をとっているか
 - ② 学習内容のなかに地域社会の特質が盛り込まれているか（「地域性の視点」と呼ぶことにする）
- の2点である⁴³⁾。①は、児童・生徒の実態が書かれたものを読まない限り判断出来ない。千葉の指導案にはこの点に関する記述が欠けているので、ここでは採ることは出来ない。しかし②の方は学習内容のみから判断出来るものであるから千葉の指導案に対しても適用可能である。

以上、ここで使用可能な馬場の分析枠や分析手法が明かになったところで、早速それらによって千葉の指導案を見てみよう。

(2) 千葉の指導案の内容分析

① 「組成視点」による分析

千葉の指導案の「学習活動」欄を組成視点によって分析すると表Ⅳ-1のようになる。すなわちこの単元の学習内容のうち、歴史的なものは14.7%、地理的なものは26.4%、公民的なものが55.9%と公民的色彩の

濃い単元構成になっている。特に、第2小単元及び第4・5小単元は完全に公民的学習内容のみからなっており、公民的学習内容はこの3つの小単元に集中している。

5つある小単元のうち、歴史-地理-公民の学習内容が最もバランスよく配されているのは、第1小単元である。ここでは歴史-地理-公民は、4:2:2すなわち50%-25%-25%の割合で学習されるようになっている。

以上は項目数による分析である。学習の為の時数によってみると、どのようになっているのであろうか。

公民対歴史・地理という形に分けてみると36時間中21時間(13+4+4)は確実に公民学習となっている。第1小単元中の「市役所見学」と「都市計画の構想」が合計4時間だったとすると⁴⁴⁾、36時間中25時間が公民的内容の学習になっている。つまりおよそ70%の時間が公民的内容の学習に充てられており、時間数からみても公民的色彩の濃い単元構成になっているのである。

これを文部省の『22年版Ⅳ』と比較してみよう(表Ⅳ-2参照)。千葉のこの授業に対応する『22年版Ⅳ』の単元は、第7学年「単元五 わが国の都市は、どのように発達してきたか。また、現在の都市生活には、どんな問題があるか」である。馬場はこの単元の学習内容を歴史的なものが14(19%)、地理的なものが28(38%)、公民的なものが31(43%)であるとしている⁴⁵⁾。公民的な学習内容が、項目数にすると半数を超える千葉のものに比べるとまだバランスのよい単元構成になっている。

すなわち、千葉はこの文部省の第7学年「単元五 わが国の都市は、どのように発達してきたか。また、現在の都市生活には、どんな問題があるか」を参考にして単元を構想したのであろうが、無意識のうちにせよ自らの社会科観によって、元のものより遥かに公民的色彩の強い単元を作成したように思われる。

しかし、統計的にみてもこのようなことが言えるかどうか確認する必要がある。そこで、 χ^2 検定にかけてみた。公民的色彩がより濃いものになっているかどうかをみることを目的にするので、学習内容に関する欄は公民的学習内容と地理・歴史的学習内容(以下、地歴的内容と略称する)と言う具合に2分する。欄が少ない分、有意差が出にくくなり、欄の数を多くして有意であるという結果が出た場合より信頼できるからである。

検定の結果、有意差はおろか有意傾向も見られなかった($\chi^2(1)=2.447, p>.10$)。つまり、統計的には有意差の出ないところまで、千葉は進んでいたのである。このことをどう解釈すべきであろうか。千葉からの次のような聞き取りをもとに解釈をしてみよう⁴⁶⁾。

(昭和22年5月の日付のついた『各教科指導要目北海道第三師範学校附属中学校・小学校(案)』のなかにある社会科年間計画《但し7月まで》は、作成者として奥村良松の名前になっている。奥村は地理担当である。公民担当の荻原あるいは千葉でなく、なぜ奥村の名前になっているのかという筆者の質問に答えて)

なぜ奥村先生が書いたのか分かりません。奥村君は地理だった。無論、地理だから(といって附属校の教官である以上)社会科ができないということはありませんが……。

社会科は私や荻原先生のように修身/公民担当の者がやっていました。だから地理の人は社会科(発足に当たってその研究)を専門にやったわけではない。もし、奥村先生がこれを書いたとすれば、我々社会科担当の者が集めた資料なんかを利用して書いたんだろうと思います。

奥村先生や福井先生と社会科について話し合ったことはありますが、でもそれは地理と社会科との関係とか歴史と社会科との関係といったものだったのではなかったかと記憶しています。

(社会科と云う教科を附属の先生方は結局どういう教科だとみていたのでしょうか、簡潔に云うと……という質問に対して)

社会科と云うのは修身とか公民が行っていた人間形成、生活指導的なものを中核にして、それに加えて単元に

表Ⅳ-1 「組成視点」によってみた千葉の単元構成

	歴 史	地 理	公 民
第一小单元	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道の開拓と郷土発達の通観 ◎近文山見学 ・旭川市発展に尽くした人々のはなし ・アイヌの伝説 	<ul style="list-style-type: none"> ・交通機関調査 ◎近文山見学 	<ul style="list-style-type: none"> ・市役所見学 ・都市計画の構想
第二小单元			<ul style="list-style-type: none"> ・食糧の不足, 住宅の不足 ・交通道德の低下 ・保健衛生施設の不十分 ・犯罪行為の続出 ・警察署見学 ・文化都市旭川建設
第三小单元	<ul style="list-style-type: none"> ・旭川市の発達形態 	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道の各都市 ・商業都市 ・文化都市 ・保養都市 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の各都市 ・交通都市 ・鉱山都市 ・遊覧都市
第四小单元			<ul style="list-style-type: none"> ・焼け跡の整理, 美化 ・都市計画～復興計画 ・建築の復旧 ・交通機関の復旧, 整備 ・公德心の高揚 ・転入者の抑制 ・常備消防本部見学
第五小单元			<ul style="list-style-type: none"> ・公民としての公共公益公德の精神態度涵養 ・公民としての社会秩序高揚 ・公民としての礼儀向上 ・交通機関の復旧, 整備 ・公德心の高揚 ・奉仕作業の実施

※ 第4小单元にある「通信機関の復習」は、いずれに分けるべきか判断に迷ったので除外した。また「近文山見学」は、歴史学習にも地理学習にもなり得たと思われるのでその双方に入れた。

表Ⅳ-2 千葉実践の公民的色彩度

	地 歴	公 民	計
文部省	42 (57.5)	31 (42.5)	73
千葉案	15 (41.7)	21 (58.3)	36
計	57	52	109

()内は、%

よって歴史的なものあるいは地理的のを加えた、大変広い内容を学習する教科というふうに考えていました。

※ ()内は、筆者によるものである。

千葉は社会科とそれ以前の(戦後生まれた、そして千葉も荻原も授業まで展開していた)公民科とは違うものであると理解していたのである。そして理解した

だけにとどまらず指導案という形で結晶化させようとしていたのである。歴史とも違う、地理とも違う、そして公民科とも異なる社会科とは一体どんな教科なのか、それを明かにするために、また、地理や歴史の内容をどう取り入れたらよいかを探究するために「奥村先生や福井先生と社会科について話し合った」とも考えられるのである。

こうした話し合いがいつごろからいつごろにかけて行われたのか、これも今となっては不明である。ただ推測として言えるのは、昭和21年9月以降から昭和22年3月ごろの間であったろうということである。昭和21年10月には、文部省から『中等学校・青年学校 公民教師用書』が出されている。その前書きには「今後は道徳教育は公民科をも含む『社会科』というような学科の一部となるように研究されるであろう。そのように見るならば、将来は独立の教科目としての「修身」はおそらく再開されないで、新たに『社会科』という学科が設けられ、新しい方向に道徳教育が改革されるであろうと予想することができる⁴⁷⁾と書かれ、公民科の発展的解消が宣言されているからである。また、福井英智は、22年4月から春光台小学校に校長として転出しており、学校経営に多忙な日々を送るようになったと考えられるのである。

こうした社会科探究を通じて千葉なりに出した答えが上記の指導案であった。「組成視点」によってこれを見たときに、たしかに公民的色彩が濃いように見える。修身や公民科に代わる新たな人間形成教科であるという意識が千葉にそれを行かせたのであろう。しかし、公民以外の内容に加えて「単元によって歴史的なものあるいは地理的のを加えた、大変広い内容を学習する教科」という社会科理解が公民的色彩に引きずられすぎのを抑えたとみていいだろう。したがって、この指導案は、公民科から社会科へと抜け出そうとし、かろうじてそれを果たすことのできたものであったと解釈できるのである。

② 「目標視点」による分析

順序から言えば、ここで「活動視点」による分析を行うべきである。しかし、千葉の指導案における学習活動の記述法からしてそれはできない。34個あげられた学習活動がすべて「公德心の涵養」「旭川市発展に尽くした人々のはなし」という具合に体言止めの形で書かれているからである。そこで、「活動視点」による分析は行わずに実践目標と知的目標がどうなっているか、馬場の言うように実践目標が30%程度は含まれているか「目標視点」による分析に入っていく。

馬場が実践目標としたのは先にみた様に、態度、能力、技能、習慣、鑑賞力の5つであった。ところが学習活動を千葉が体言止めの形で書いたために、われわれは能力、技能、習慣、鑑賞力の4つについて、それらが盛り込まれているのかも判断できなくなっている。態度目標のみが判断可能となっているのである。

態度目標として挙げることができるのは次の4つである。

・公德心の高揚 ・公民としての公共公益公德の精神態度涵養 ・公民としての社会秩序高揚 ・公民としての礼儀向上

この四つがあるということからだけでは何も言うことはできない。せいぜい、千葉が単元の目標を具現化するために、それにふさわしい小単元を設けていたということが言えるだけである。また、ここにある「公德心の高揚」「公共公益公德の精神態度涵養」「社会秩序高揚」「礼儀向上」などの言葉から、千葉においては、秩序志向的な態度の育成が重視されていたということも言ってよいだろう。

実践目標とされた態度目標については、この2点を言うにとどめるべきであろう。

しかし千葉の指導案の第5小単元に盛り込まれた「奉仕作業の実施」には着目しなくてはならない。「22年版Ⅱ」の「学習活動の例」には、そのようなものは見当たらないからである。たしかに『22年版Ⅱ』の「目標」及び「教材の排列」、そして「学習効果の判定」には、千葉の設定した「奉仕作業の実施」を思わせる次のような記述がある。

目標(六) 都市生活の改善に関心を持ち、都市の清掃・美化など、自分たちでできることには、積極的に援助する態度を養わせること

教材の排列(六) わが国の都市を住みよい所にするには、どうしたらよいか。また、われわれはこれに対してどのように協力できるか。

学習効果の判定(四) 生徒は、郷土の都市生活に含まれている欠陥を認識し、これが改善に真剣な興味を感じ、また自分たちのできる範囲で、これに協力するようになったか。

しかし肝心の「学習活動の例」をみると、千葉の「奉仕作業の実施」に該当するものはないのである。それらしきものも実際の学習活動となると、すべて「～について、討議すること」となっており実践活動にまではいっていない。

例えば「(七一) 郷土の都市の衛生状態を、今後、どのように改善したらよいか、また、生徒は、これに対して、どのように協力したらよいかを考えて、討議すること」「(七二) 郷土の都市の美化に対して、生徒として、どのような点で協力できるかを調べ討議すること」という具合である。

これよりわれわれは次のように考えることができるだろう。千葉は文部省の社会科担当者以上に社会科という教科を実践の教科として位置づけていたのである。そして目標—学習活動—学習効果の判定に一貫性をもたせて、単元構成をしたのである。

③ 「地域性の視点」による分析

千葉は馬場の設けたこの評価視点を完全にクリアしているといえるであろう。単に旭川市の問題を取り上げるにとどまらず、子どもたちが日常目にしていく岐線とその沿線風景を先ず取り上げ、それによって子どもたちが住む近隣地域の発展を考えさせ、更にそこから旭川市をよりよくするためにはどうしたらよいかというように問題を旭川市全体に広げているからである。

また更に子どもたちの目が日本全体の都市に向くように単元が構成されている。近隣地域の問題→旭川市全体の問題→日本の問題というように同心円状に問題が発展し、最後に今一度、こういう日本の都市の現実のなかで、自分ができることは何かを考えさせ実践させるというこの単元構成は、馬場が現段階では「一応適当なもの」「比較的よい」⁴⁸⁾ものとした伊那町案(長野県)や徳島案(徳島県)より優れているかもしれないのである。

馬場が優れた単元構成になっているとして取り上げたのは、伊那町案等の「7年第4単元 わが国のいなかの生産生活は、どのように営まれているか」であった。伊那町案は馬場の紹介するところによれば次のような単元構成になっている⁴⁹⁾。

「1. 伊那町の農業はどのように行われているか 2. 耕地を如何にして広めてきたか 3. 農村をよくするためにどんなことが行われているか 4. 農家の生活の悪い点はどんなところだろうか 5. 農村の生活をどのように改善したらよいか」

これは、伊那町全体の問題→日本の問題という問題の発展のようにとれる。仮にそうだとするなら、子どもたちに身近な近隣地域から問題をスタートさせていないのである。千葉の単元構成の方が優れているかもしれないといったのはこの点においてである。

徳島案は、

「1. 徳島市の近郊農村の観察、調査 イ 食糧増産にどのような努力が払われているか ロ 近郊農村の特色、近郊農村における生活の有利な点、不利な点 2. 上八萬村、佐那河内村の調査（山村）3. いなかの生活をどう改善すべきか」⁵⁰⁾となっており、これも伊那町案と同じく徳島市全体の問題→日本の問題という構成になっており、千葉案に比べたとき、ずっと粗い単元構成でしかないと思われるのである。

なぜ千葉がこのようなきめの細かな単元構成ができたのか、現在のところは分からない。

(3) 全体社会との相互作用

以上論じ来たったことは、千葉が当時の全体社会が社会科に関して課題としていた所をどう受け止め、自分なりにそれをどう解決したかということでもある。

社会科は、戦前の修身にかわって昭和21年に民主主義的人間形成を目標とした教科、公民科とも異なる教科、また歴史、地理とも異なる教科であるという位置づけがなされていた。

また学習活動についても生徒の主体的活動を保証するものが求められていた。更に地域教材の取り上げまでが要求されていたのである。

千葉は決して見事には行かないまでも、「組成視点」においては印象的にはともかく、統計的に有意性が出ないところまでは内容構成ができたのである。しかも地域教材の取り上げという課題は、かなり緻密な形で解決しているのである。このように千葉は、全体社会の要求を素直に受け入れ、それを優等生的に解決しようとし、実際になし得たのである。

しかし、「22年版Ⅱ」の「学習活動の例」にはみられない「奉仕作業の実施」を単元のなかに位置づけているのは、千葉の強烈な自己主張、あるいは譲ることのできない社会科観の現われとみることができるのではないだろうか。つまり、千葉は創意と個性を持った実践家だったといえるのではないだろうか。

旭川師範学校時代の千葉を評した恩師の言葉のなかに、また夏季全道中等学校体育競技大会壮行会における師範学校長小野貞助のはなむけの言葉に反対した千葉の言葉のなかに、我々は千葉の強烈な個性を窺うことができるであろう⁵¹⁾。

- 佐々木正先生には、師範学校1年入学以来、5ヶ年間、担任していただきましたし、また寄宿舎における舎監の先生として、親同様の御愛情、御親切を頂戴して参りました。卒業に際しての、恩師佐々木先生の御言葉は、常に私の脳裏にありました。謹書させていただきます。

「正確、緻密、努力、向上の心は、終生を一貫せよ。然し、他人に求むるに、余り理想に走るなかれ。歩一步の穏やかな態度をとれ。」

- 師範学校長「小野貞助」氏は常に「旭師魂」を力説し、「至誠一貫」の教育目標を樹立して北海道の教育推進のために、努力された立派な方でした。高潔な人格の所有者でありました。

毎年実施される全道総合大競技大会参加と、総合優勝獲得の為の大壮行会、激励会が毎年校内大講堂で行われ、校長先生始め、全職員の方々が出席され、私共生徒も参加して、氣勢を上げました。校長先生の御発言に対して、私は立ち上がって次のように激励したことを記憶しています。

—校長先生—

「皆さん。しっかり頑張ってきてください。但し、実力に於いて、差があり、相手チームが強い場合には、潔く退陣し、明年の時期に具えてください。」

—千葉—

「皆さん。只今の校長先生の御言葉は御もっともな御言葉ですが、私は本日の、此の壮行会に限り、校長先生の御言葉に異議があります。反対です。『実力が劣った場合は、負けなさい。』とゆうことですが、私共は、絶対に負ける訳にはゆきません。絶対に勝つのです。勝たなければなりません。旭師健児の名において、絶対に優勝するのです。…（後略）…」

努力家で、負けず嫌いで、己にも厳しく且つ他者にも求めるところ大というのが千葉だったのである。そして相手がたとえ目上の尊敬に値する者の場合であっても、その意見に反対ならば反対であると堂々と論じる激しさを、千葉は持っていたのである。

《註及び参考文献》

- 1) 溝口五郎は、昭和13年北海道第三師範を卒業し、昭和19年3月31日から昭和23年3月31日まで附属校教官を務め、江部乙町北辰中に転出している。
- 2) 松本謙太郎は、昭和18年北海道第三師範を卒業し、同年9月30日から昭和26年3月31日まで附属小その後同年4月1日～昭和35年6月19日まで附属中学校教官を務め、上川教育局へ転出している。
- 3) 「S.22三師合同研関係文書」中の「協議会」資料より。
千葉の記憶では千葉の授業が屋内運動場で行われたことになっている。今となってはどちらが正しいのか確かめることはできない。そこで本稿では、文書記録のほうにしたがった。
- 4) 「北海道旭川師範学校校舎其他平面図」（縮尺1200分の1 昭和15年8月調）による。
- 5) 『北海道学芸大学旭川分校四十年史』p.6, 1964.
- 6) 同上
- 7) 同上書, p.8.
- 8) 「S.22三師合同研関係文書」中の「会場係計画案」
- 9) 「S.22三師合同研関係文書」中の「会場係計画案」では、児童生徒の座り方まで決めておく必要もないし正確に書く必要もなかったであろう。学習形態と座席の形態とは切り離せないものである。授業が分団毎の発表という形で進められたのに、座席のほうは分団毎ではなく一斉学習のときのように生徒が全員教師のほうを向いて座っていたということは考えにくい。
- 10) 「S.22三師合同研関係文書」中の社会科指導案
- 11) 『旭川市史』第2巻, p.404, 1959.
- 12) 同 前, p.433.
- 13) 同 前, p.434.
- 14) 同 前, p.435.
- 15) 同 前, p.436.
- 16) ~19) 同 前, p.435.
- 20) 同 前, p.446.
- 21) 同 前, p.463.
- 22) 同 前, p.453-454.
- 23) 同 前, p.455-458.

(以下の「註及び参考文献」は、ページ数の関係で次回に)